

日本百済大寺の造営と東アジア (特集
東アジア6～7世紀における勅願寺高層木塔の考古学的比較研究. 第四章
東アジア古代の勅願寺高層木塔の象徴性と政治的意義)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-11-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 熊谷, 公男 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24326

III 日本百済大寺の造営と東アジア

熊谷公男

はじめに

百済大寺は639年に舒明天皇が大王として初めて発願した寺院であり、しかもその塔は倭国で最初の九重塔であった。その重要性については、これまでも一部の研究者の間で論議をよんできたが、1997年以降の発掘調査によって発見された吉備池廃寺が7世紀の最大級の寺院跡で、さらにそれが百済大寺であることが確実視されるにおよんで、百済大寺の歴史的な重要性が再認識されるようになった。本稿では、文献史学の立場から、改新前後の7世紀中葉という時期に、飛鳥からさほど遠くない百済の地に九重塔を中心とする空前の巨大伽藍が造営されたことの意味を、東アジア世界のなかで考察してみたい。

百済大寺の九重塔は、『日本書紀』（以下『書紀』という）や747年（天平19）に作成された『大安寺伽藍縁起并流記資財帳』（以下『縁起』という）が記すように、639年（舒明11）に舒明天皇が発願したとみてよいと思われるが、その後の伽藍の造営がどのように進められたかという問題は、百済大寺造営の意義を考えるうえでもきわめて重要であると思われる。そこで本稿では、まず両史料の検討を行いながらこの問題を考えてみたい。

また百済大寺の造営が進められた7世紀中葉は、朝鮮半島では3国の争いに唐が介入して戦乱が本格化し、国内では改新のクーデターが勃発するという激動の時期にあたっている。百済大寺の造営の意義を明らかにするためには、このような国際情勢や国内情勢との関わりを考えると不可欠と思われる。そこで後半では、この問題を取り上げることとする。

1. 百済大寺の造営過程

(1) 舒明天皇による百済大寺の発願

百済大寺の造営に関する基本的な文献史料は『書紀』と『縁起』である。そこで、百済大寺の造営過程の検討を行うまえに、基礎的作業として最初にこの二つの史料相互の関係を見ておきたい。両史料のうち九重塔に直接関係する舒明～孝徳朝の部分に対比的に掲げるとつぎの通りである。

表1. 百済大寺創建関係史料対照表

【日本書紀】	【元興寺伽藍縁起并流記資財帳】
(A) 舒明11年(639)7月条 詔曰、今年、造作大宮及大寺。則以百済川側為宮 廬。是以、西民造宮、東民作寺。便以書直泉為大 匠。	(イ) (舒明)十一年歲次己亥春二月、於百済川側、子 部社乎切排而院寺家建九重塔、入賜三百戸封。号 曰百済大寺。
(B) 同年12月条 是月、於百済川側、建九重塔。	(ロ) 此時、社神怨而失火、焼破九重塔並金堂石鷗尾。 (ハ) 天皇將崩賜時、勅太后尊久、此寺如意造建。此 事為事給耳。
(C) 皇極元年(642)9月乙卯条 天皇詔大臣曰、朕思欲起造大寺。宜發近江与越之 丁。〈百済大寺〉	(ニ) 爾時後岡基宮御宇天皇造此寺司阿倍倉橋麻 呂・穗積百足二人任賜。
(D) 大化元年(645)8月癸卯条 遣使於大寺、喚聚僧尼、而詔曰、…別以惠妙法師、 為百済寺々主。…	

上の『書紀』と『縁起』の記事を相互に比較すると、関連のある記事でも具体的内容が異なっていたり、係年月が一致しなかったりするので、かつて水野柳太郎氏が「両者は無関係に成立した記録であろう」(水野1957)としたように、直接の引用・参照関係が認められないことは明らかである。したがって、系統を異にする両史料が一致する点は、基本的には史実と考えるべきであろう。ただしもう一方で、その後に指摘されたように、(A)(B)(イ)に共通して「百済川側」といった表現が用いられているのは、『書紀』『縁起』の記事のなかに共通の原史料に由来する部分もあるという可能性を考えておく必要がある(星野1986、塚口1992)。

さて『縁起』の冒頭には、大安寺の起源は厩戸皇子建立の熊凝寺(熊凝道場・熊凝精舎)にまでさかのぼるといふ記述がある。すなわち太子が病氣にかかったときに田村皇子(舒明天皇)が見舞いに訪れると、熊凝寺を天皇家のための大寺にしたいと依頼されて譲られ、即位後にそれを百済川のほとりに移して百済大寺としたというのである。しかしこの縁起については、歴史的事実とは考えがたいという説がはやくから出され(福山1948)、その後の諸氏もほとんどこれに賛同している。この話は太子が、のちに田村皇子と王位を争うことになるわが子の山背大兄王を差しおいて皇子に寺を譲ったことになっているなど、きわめて不自然な内容で、やはり後世の仮託とみるべきである。最近になってこの話に歴史的事実を見いだそうとする説も出されているが(三舟2001)、したがいがたい。

つぎに百済大寺の創建説話であるが、『書紀』『縁起』とも639年(舒明11)に「百済川側」に九重塔を建てたとする点では一致している。『書紀』ではそれが舒明天皇の命によることを明記

しているが、『縁起』はふれていない。ただしそれは、塚口義信氏のいうように、のちに田村皇子（舒明天皇）を中心にした龍凝寺説話が加上されたために、後続する百済大寺の九重塔建立に舒明発願を明記する必要がなくなったためと思われ、加上以前の“原縁起”では舒明の発願であることが書かれていたとみてよいであろう（塚口 1992）。また『書紀』は、この年の7月に「百済川側」に大宮・大寺を造営するよう命じた詔が発布され（(A)）、12月に「百済川側」に九重塔を建てた（(B)）とするが、『縁起』には同年2月に「百済川側」で子部の社を切りはらって九重塔を建てたとある。双方の月が一致しないし、『書紀』が大宮（百済大宮）と大寺（百済大寺）の造営を同時に命じたとするのに対して、『縁起』の方には大宮についての記述がないが、これも『縁起』が直接関係のない大宮関係の記事を採録しなかったためとみられる（塚口 1992）。したがって、両書に共通する原史料には、「舒明 11 年に、舒明天皇が百済川の側に大宮と大寺を造ることを命じた」、という内容の記述があったことは認めてよいと思われる。

創建説話群のうち(B)と(イ)には、ともに舒明天皇が「九重塔を建てた」という記述があるが、これはどう考えればよいであろうか。(B)には(A)とおなじく「百済川側」という語句がみえるので、(A)と一連の史料とみてよいであろう。(A)には「大宮」の造営についても記述されているので、寺の縁起の類ではなく、おそらくは朝廷の記録で、一定の信憑性のあるものとみてよい（塚口 1992）。したがって、舒明天皇が 639 年に「大寺」の九重塔の建立を発願したことは事実であったと認められる。

ただし、(B)の記事がいかなる事実を伝えたものかを見極めることは容易でない。「建」を建立＝竣工と解すると、舒明天皇の大寺の発願をこの年のこととみる限り、わずか数ヶ月でわが国初の九重塔が完成したことになってしまい、とうてい事実とは考えがたい。したがって(B)を塔の竣工と理解することは不可能である。また大橋一章氏によれば、古代の寺院造営では、堂宇の建築に着手するまえに、伽藍の設計や杣取・乾燥・加工といった必要な建築資材の弁備を行わなければならないし、その後も寺地の整地や各堂宇の配置の決定などをする必要がある。さらに起工後も、一般的に一つの堂塔の完成まで4、5年かかるのがふつうで、しかも通常は複数の堂塔を同時並行して造営することはなく、一つずつ順次建築していくので、一つの寺院の伽藍が完成するまでに20～40年の歳月がかかったという（大橋 1976）。このような古代寺院の一般的な造営のあり方からみても、従来から指摘されているように、舒明朝（『書紀』によれば舒明天皇は13年(641)10月に死没）のうちに九重塔が完成したとみることも無理であろう。大橋氏が「舒明崩御時に百済大寺では一宇の堂塔さえも完成していなかった」（大橋 1982）と推定しているのが妥当な見解と思われる。

百済大寺の九重塔に関しては、かつてはその存在を否定する見解もあったが（星野 1986）、如上の文献史料の検討からも、また百済大寺に比定される吉備池廃寺の巨大な塔基壇が発見され

たことからみても、やはり九重塔の建立は事実と考えざるを得ない。そうすると、現段階において検討されるべき課題は、舒明天皇が発願した九重塔はいつごろから着工され、いつごろ完成したのか、といった問題であろう。

さて、(B)が九重塔の完成を意味する記事ではないとすると、どのように解したらよいであろうか。水野氏は「計画か着工を記したものであろう」(水野1957)とし、大橋氏は「塔基表示のための木柱を立てるといふ仏教行事が行われたことを意味する」(大橋1982)と解している。大橋氏の説は、かつて小杉一雄氏が、六朝期の木塔の造営ではまず木柱を立て、そこが塔建立の地点(塔基)であることを表示する仏教行事があったということ指摘し、それを前提として『上宮聖徳法王帝説』裏書(以下、単に「裏書」という)に記された山田寺の造営記事に「癸亥(663=天智2年)構塔」とあるのを塔基表示のための仏教行事と解釈した(小杉1934)ことに依拠したものである(大橋1979)。裏書には「癸亥構塔、癸酉年(673=天武2)十二月十六日建塔心柱、…丙子年(676=天武5)四月八日、上露盤」と書かれており、癸酉年に塔心柱が建てられ、丙子年に塔が竣工して露盤が取り付けられたことが明らかなので、小杉氏は癸亥年の「構塔」を塔基表示と解したわけである。しかしこの説が成り立つためには、日本にも塔基表示の仏教行事があったことを別個に論証する必要があると思われる。したがって、小杉説に依拠して(B)を塔基の表示と解した大橋説も、一つの仮説というべきであろう。水野説のうち「計画」というのは「建」の字義と隔たりがあるので、ここは「着工」、より具体的にいえば九重塔の心柱(刹柱)を建てたことを意味するとみるのがもっとも穏当なのではなかろうか。心柱の建立については、右の裏書に「癸酉年十二月十六日建塔心柱」とみえるし、『書紀』にも法興寺の造営記事中に「建刹柱」(推古元年(593)正月丁巳条)とあり、寺院の造営において特筆すべき重要な工程であった。

ちなみに「百済大寺」という名称は、当初からのものではなかったとみるべきであろう。というのは、(A)に「大寺」とあるのは、あくまでも大王の居所としての「大宮」に対する呼称で、のちの「勅願寺」に近い言葉と解され、決して固有名詞ではないからである。(D)に「百済寺」とあるところからみても、当初の寺名は百済寺であったとみたほうがよいであろう(ただし本稿では、便宜的に「百済大寺」という呼称で統一する)。

(ロ)の九重塔・金堂石鷄尾の焼失記事は『縁起』のみにみえ、『縁起』作者の造作ということではほぼ諸説一致している。吉備池廃寺の調査でも、塔跡および金堂跡から火災の痕跡は検出されていない。塚口氏は、天平年間に大安寺僧道慈によって大安寺の大般若会催行の史的根拠として述作されたとする(塚口1992)。

(2) 皇極天皇による「造此寺司」設置の意義

舒明没後に即位した皇極女帝は、亡夫舒明の遺志を引き継ぎ、百濟大寺の造営を継続する。(C)によれば、改めて「大寺」起造の詔を發布して、近江と越から役丁を徴発するように大臣の蝦夷に命じている。さらに(二)に「後岡基宮御宇天皇」が、阿倍倉橋麻呂・穗積百足の二人を「造此寺司」に任じたとあることが注目される。「後岡基宮御宇天皇」とは、通常は斉明天皇のことであるが、ここは舒明薨去直後に「爾時」とあり、また阿倍倉橋麻呂が649年(大化5)に没しているので、皇極天皇をさすことが明らかである。阿倍倉橋麻呂は阿倍内麻呂ともいい、大化改新によって樹立された新政権で左大臣に抜擢された有力な人物である。

(C)と(二)はいずれも皇極天皇即位直後のことと理解されるので、一連の出来事の異なった記録で、相互補完の関係にあるとみてよいであろう。そうすると皇極天皇は、即位後まもなく「大寺」の造営の意思を改めて表明して、それに必要な役丁の徴発を命じるとともに、造営事業を統括する「造此寺司」を新たに任命したということになる。筆者はこのことに注目したい。百濟大寺の本願は舒明天皇であるが、その大后であった皇極天皇がいわば第二の発願者であったといえよう。

舒明天皇が大宮と大寺の造営を命じたときには書直県が「大匠」に任じられているが、これが「大宮」「大寺」のいずれ(あるいは両方)を担当したものか明らかでない。百濟宮は、造営を命じた翌640年(舒明12)10月に完成して舒明が遷居しているのに対し、「大寺」はさきにもたように639年末に刹柱を建てているので、工事は両方並行して進められたが、当初は「大宮」の建築が優先されたとみられる。そうすると、書直県は「大宮」「大寺」両方の「大匠」であったとしても、実質的には「大宮」の建築を担当したとみてよいであろう。いずれにしても、舒明朝には「大寺」のみの造営組織はまだ編成されていなかったのである。そうすると皇極天皇の即位とともに「造此寺司」が任命され、役丁の徴発が行われたのは、ここにおいてはじめて「大寺」の造営組織が編成されたということの意味しよう。そして文献史料から確認できる造寺司は、この百濟大寺のものが初見である。これらの点からみて、皇極朝の「大寺」の造営組織は舒明朝のその単なる継続ではなかったと考えるべきである。

百濟大寺の造営組織が皇極女帝の即位後にはじめて編成されたとなると、皇極朝に入ってその造営体制が大幅に強化されたことになるわけで、造営が本格化するのも皇極朝になってからとみたほうがよいと思われる。直木孝次郎氏は、「造此寺司」に阿倍倉橋麻呂が任命されたことに加えて吉備池廃寺の地が阿倍氏の本拠地である桜井市阿倍に近接していることなどから、阿倍氏が百濟大寺の造営に協力したことを推測している(直木1998)。そうであればなおのこと、舒明がその晩年に発願したわが国初の九重塔の建立は、皇極が即位後に組織した「造此寺司」体制によって格段に強化され、強力に推進されていったと考えられる。なお倉橋麻呂が新政権で

新設された左大臣に任命されたのは、有力貴族のなかの最長老ということがあったにしても、それだけとは考えがたく、百済大寺の造営を中心になって推進した功が認められてのことではないかと思われる。とすれば、百済大寺の造営が明確な政治的意味をもっていたことの一証となろう。

百済大寺の九重塔の完成時期を直接示す文献史料は残されていないが、(D)はその時期を特定する手がかりを与えてくれる。この記事は改新政権が僧尼を「大寺」（後述のように飛鳥寺と考えられる）に招集して仏教興隆の詔を下したものであるが、その中で十師などとともにも百済寺（＝百済大寺）の寺主の任命が行われている。ということは、百済大寺はこのころまでに寺主をおくほどの堂宇が完成していたということになる。既述のように、舒明朝末年に九重塔から造営が始まったとみられるので、このときまでに九重塔が完成していたことは確実である。このように文献史料からは、百済大寺の九重塔完成の下限は、一応、大化改新のおこった645年（大化元）と考定されるが、筆者はつぎにみる吉備池廃寺出土の瓦の様相から、金堂の完成時期も九重塔の竣工とさほど隔たっていなかったのではないかと考える。

吉備池廃寺から出土した瓦の検討から、いくつかの重要な知見が得られている。一つは、吉備池廃寺創建瓦の年代的な位置づけである。吉備池廃寺の創建軒丸瓦に関しては、その様式的特徴が山田寺金堂の創建軒丸瓦よりもわずかに先行するとした大脇潔氏の見解（大脇1995）がひろく認められている。さらにその同範瓦が木之本廃寺（奈良県橿原市）、四天王寺（大阪市）、海会寺（大阪府泉南市）などで出土している。一方、創建軒平瓦は斑鳩寺（法隆寺若草伽藍）の軒平瓦の押し型をのちに転用していることが判明した。以上のような考古学的な知見に文献史料から知られる絶対年代を勘案して、吉備池廃寺の報告書『大和吉備池廃寺—百済大寺跡—』（以下、単に「報告書」という）では吉備池廃寺創建瓦の年代を、おおむね630年代から640年代初頭と判断した（奈良文化財研究所2003）。木下正史氏も「六三〇年代後半から六四〇年代初め頃と推定できる」と、この年代観を基本的に踏襲している（木下2005）。

もう一つの興味深い知見として、吉備池廃寺の出土瓦が、創建期以降の補修瓦などをふくまず、構成が単一であるという特色をもつことがあげられる。これは、遺跡の存続期間が比較的短かったということを示すと同時に、調査が行われた塔と金堂の双方の屋根を葺いた瓦が同じ型式に属していることを意味するわけで、二つの堂宇に用いられた瓦はほぼ同時か、そうでなくとも同じ造瓦組織によって比較的近接した時期に製作されたとみなければならないであろう。しかもその軒丸瓦が山田寺金堂の創建軒丸瓦よりも様式的に若干先行するというになると、山田寺金堂が完成する以前に、百済大寺の九重塔はもとより金堂も完成していたという可能性も出てくる。

さて一つ目の知見である吉備池廃寺を含む7世紀中葉の瓦の編年と年代観は、様式論に遺跡

相互の同範・同型の関係、それに文献史料による絶対年代を加味して周到・精緻に組み立てられており、門外漢が容喙しうるものでないことはもちろんであるが、文献史学の立場からみると、全体としてその年代を古くみすぎているように感じられる。年代観の主要な根拠としては、裏書に「辛丑年(641=舒明13)始平地。癸卯年(643=皇極2)、立金堂之。代(戊カ)申(648=大化4)始僧住」と山田寺金堂の造営の年が記されていることに加えて、四天王寺で吉備池廃寺の軒丸瓦の瓦範を転用したと判断される瓦が出土していることが、大化の難波遷都にともなう伽藍整備と関連づけて解釈することなどから下限を定め、一方上限は、斑鳩寺の中期(622-643)に編年された軒平瓦の押し型を吉備池廃寺で転用していることから定めているようである。

そこでまず裏書に記す山田寺金堂の造営についてしてみると、かつて大橋氏が解したように、癸卯年(643=皇極2)に金堂を「立」てたというのは「本格的な建築工事の開始」、すなわち起工を意味し、戊申年(648年=大化4)に僧侶が住み始めたとあるので、遅くともこのときまでに金堂は完成していたと解するのがよいと思われる(大橋1979)。報告書でも「舒明13年(641)に創建され、大化5年(649)までに完成したと考えられる」と述べられていて、基本的に大橋説が踏襲されているようである。そうすると、山田寺金堂の創建瓦が焼成された下限も648年まで引き下げて考えることが可能となる。一方、吉備池廃寺すなわち百濟大寺の九重塔は、さきに検討したように、639年(舒明11)12月に心柱を建て、遅くとも645年(大化元)8月までには竣工していたと考えられるから、その所用瓦もこの間に焼成されたものとみてよいであろう。そうすると、その年代は640年代の前半、それもおそらくは皇極天皇の即位後、「造此寺司」が編成される642年(皇極元)9月以降のことと考えてよいのではなかろうか。このように吉備池廃寺の創建瓦の年代を642~645年ごろに引き下げてみても、前記の瓦の考古学的検討から判明する遺跡相互の関係と齟齬をきたすことはないと思われる。

筆者には、皇極天皇の即位後、百濟大寺の造営組織(「造此寺司」)が編成され、造営体制が大幅に強化されたという文献史料から知られる事実と、吉備池廃寺出土の瓦が単一の構成を取っているという考古学的事実は、互いに照応しているように思われる。すなわち、皇極朝初年にこれまでにない大規模な造営組織が編成され、百濟大寺の造営が強力に推進されていくが、その造営体制のもとで、舒明朝末年に刹柱が建てられ造営が始まっていた九重塔ばかりでなく、金堂の建造も並行してすすめるという方式がとられたのではないかと想像する。それにもなって二つの堂宇の屋根を葺く瓦も同じ造瓦組織でいっきに焼成され、遅くとも山田寺金堂が竣工する648年ごろの少しまえまでには百濟大寺の金堂も完成したという想定をすると、塔・金堂がともに山田寺金堂よりわずかに様式的に遡る同じ型式の創建瓦を用いているという考古学的事実がよく説明できると考える。

さてこのような想定が成り立つとすると、皇極朝の初年に編成された造営組織の規模の大き

さと造営工事の異例の速さが改めて注目される。わが国初でのちの大官大寺に匹敵する規模の九重塔と山田寺金堂の3倍以上の面積の金堂とを並行して建設を進め、しかも5年ほどで二つの堂宇を完成させた（金堂の竣工は九重塔よりも少し遅れたかもしれない）ことになるからである。そうだとすると、百済大寺はわが国初の大王発願の寺院であるばかりでなく、その主要伽藍は、大化改新をはさんで異例の短期間で完成されたということになる。皇極は、のちに重祚して斉明天皇となるが、斉明は世の非難を浴びるほどの「興事」好きの女帝として知られる。その片鱗は、すでに百済大寺の大造営にみられたといってもよい。

以上の考察に大過ないとすると、改めて皇極天皇が改新前夜に空前の大伽藍をスピード造営した背景が解明される必要があるだろう。これは、大化改新論の重要な論点ともなりうる問題ではないかと考える。

さて、皇極天皇（宝皇女）は改新のクーデター後、弟の孝徳天皇に譲位するが、その後も『書紀』によれば「皇祖母尊」と呼ばれて大きな権威を保持していた。その宝皇女は、なお百済大寺の造営を中心になって進めていたようで、『縁起』によれば庚戌年（650＝白雉元）10月に製作し始めた丈六の繡仏を翌辛亥年3月に完成させて百済大寺に奉納しており、『書紀』にも対応する記事がみえる。この繡仏の奉納は、百済大寺の堂宇の竣工と関係があると思われるが、大橋氏は、中国においては六朝から隋唐にかけて繡仏が盛行し、また女性が製作の願主になる場合が多かったということを傍証としつつ、この繡仏を百済大寺金堂の本尊に推当し、金堂の完成時期に合せて製作されたと推測している（大橋1982）。一方、報告書では繡仏が礼拝の対象としては本尊の補足的な位置づけであり、通常、講堂に置かれるものであるとの理解から、これを講堂の本尊と推定している（奈文研2003）。筆者は、既述のように、山田寺金堂の竣工以前に百済大寺の金堂は完成していたと考えるので、これを講堂の本尊とみる報告書の説にしたがいたい。講堂もまた異例のスピードで建造されたことになる。

なお『縁起』によれば、天智天皇が造立した乾漆丈六像と四天王像が大安寺に伝存しているが、これはもともと百済大寺に奉納されたものである可能性が高い。このことに『縁起』が、斉明天皇が亡くなるときにもなお造営工事が完了していなかったと伝えることを勘案すると、一部の殿舎の造営は天智朝にまでもち越された可能性もある（大橋1982）。

壬申の乱に勝利した天武天皇が673年（天武2）に即位すると、その年のうちに百済大寺を高市の地に移すことにして造寺司を任命し、寺名を高市大寺と改めた。こうして百済大寺は、舒明天皇が639年に発願して以来、30余年の歴史を終えるのである。

2. 七世紀中葉の東アジア情勢と百済大寺の造営

(1) 640年代の東アジア情勢と倭国

以上のように、百済大寺は舒明天皇の発願に端を発し、その大后であった皇極女帝がそれを引き継いで主要伽藍を短期間で建立した。さらに舒明の皇子である天智天皇も仏像を奉納しているので、造営に関わった可能性もある。大橋氏は百済大寺の造営には、本願の舒明以後、皇極・斉明、さらには天智などの天皇が関わっているのに、皇極から譲位された孝徳だけが関わっていないことに注目し、「百済大寺が舒明天皇家の私的な寺院として、その家族たちによって造営され」たことを指摘している(大橋1982)。筆者は、後述するように百済大寺を単なる王家の私寺とみることはできないと考えるが、舒明の王統に直接連なる人々が継続的に造営を行ったということは重要な指摘である。かつて田村圓澄氏は、百済大寺は天皇発願の日本最初の「官寺」であると同時に、舒明の「私寺」でもあったとした(田村1963)。氏の「官寺」「私寺」という概念には問題もあるが、初の大皇発願の「大寺」であったという点で百済大寺の建立は重要である。その日本初の「大寺」を象徴するものこそが九重塔であった。

どうして舒明天皇は百済大寺九重塔の発願をするに至ったのであろうか。つぎにこの問題を当時の東アジア情勢から考えてみたい(以下、主として山尾1989・1992による)。

そこで当時の東アジア情勢をみると、かねてより高句麗・百済の侵攻に悩まされていた新羅は、621年に成立直後の唐に入貢して以来、唐との関係を強めていった。『旧唐書』新羅伝には「此より朝貢絶えず」と記されている。唐は630年に東突厥を服属させ、翌年、その余勢をかって高句麗の対隋戦争の記念塚である京観けいかんの破壊と遺骨の収集を行った。唐の侵攻の意図を察知した高句麗は、ただちに千里を超える長城を築きはじめる。こうして朝鮮半島の軍事的緊張が高まっていった。

百済大寺の造営が進められる640年代になると、東アジアの緊張は一段と高まる。その原因となったのは唐の高句麗征討計画が始動しはじめたことである。641年、唐の太宗は使者を高句麗に送り、軍事的観点からその地勢を探らせた。唐の侵攻が間近に迫っていることを確信した高句麗は、長城の完成を急がせる。一方、百済では641年に即位した義慈王が、後に述べるように、翌642年正月に太子の翹岐(扶餘豊璋)らを離島に追放して独裁体制を敷くとともに、唐の軍事力の大半が高句麗に振り向けられているのを好機到来とみて、同年7月、突如として大軍を率いて新羅の南西辺に進軍し、旧加耶地域の大半を奪取することに成功した。

この百済の大攻勢が発端となり、半島情勢は急速に流動化していく。唐・朝鮮諸国に倭国も巻き込んで活発な外交戦略が展開されるとともに、そのような対外的な危機が内政に転化して朝鮮諸国や倭国で政変が相ついで起こった。まず高句麗では642年に淵蓋蘇文のクーデターが

起こるが、これは対唐主戦論の強硬派政権の誕生であり、これ以降、高句麗と百済の提携は強まっていく。一方、百済は翌643年(皇極2)に太子豊璋を大使として(「質」とも書かれる)倭国に派遣して体よく国外追放するとともに、百済の旧加耶地域の領有の承認を倭国に取りつけようとした。この百済の外交攻勢を受け、7世紀初頭以来、いわば百済・新羅との等距離外交を基本方針としてきた倭国は、大きく百済との提携に傾いていくのである。そうした外交政策の転換のなかで同年11月には山背大兄王が蘇我入鹿の襲撃を受けて打倒され、上宮王家が滅亡するという事件が起こり、さらに645年(大化元)6月には改新のクーデターが勃発する。

一方、半島では百済の攻撃を受けて窮地に陥った新羅が、王族金春秋を宿敵高句麗に派遣して救援を求めたが、高句麗はこれを拒絶したばかりか、逆に百済と結んで新羅を攻撃する姿勢を示した。そこで新羅は再び外交路線の転換を余儀なくされ、643年には唐に遣使し、救援軍の派遣を要請する。ところが、このとき唐の太宗は交換条件として新羅がとるべきいくつかの策を提示し、そのなかに新羅は女王を立てているから隣国に侮られるので、それを廃して代わりに唐室の男子を暫定的に新羅王位につけよ、という新羅にとって承服しがたい一項があった。この唐の提案は支配層に大きな衝撃を与え、やがて内政に転化していくことになる。

唐は、結局、新羅の乞師に応じ、644年には戦争の準備を急ピッチで進めて「討高麗詔」を發布し、翌645年2月に太宗みずから出陣をする。こうして唐の高句麗征討がついに開始されるというのが、改新のクーデター勃発直前の東アジアの状況であった。

その改新のクーデターが起こるのが645年(大化元)6月で、唐の高句麗征討が始まったという情報は、遅くともその直後の7月に来朝した百済・高句麗などの使者によって倭国にもたらされた。唐はその後も647年、648年と相次いで高句麗征討を行うが、いずれも失敗に終わっている。

この間、新羅では、643年に唐が提示した女王廃位論をめぐる国論は二分し、支配層は親唐策を基本としつつも、依存派と自立派に分裂していく。そして647年、上大等の要職にあった依存派のリーダー毗曇らは「女主は善く理める能はず」(『三国史記』新羅本紀善徳女王16年正月条)と主張してクーデターを起こし、乱のただ中に善徳女王が死去するが、自立派のリーダー金春秋と結んだ金庾信らによって乱は鎮圧され、すぐさま真徳女王が即位した。この毗曇の乱は、対外的危機が内政に転化して起こった乱の典型であって、乱後、女王のもとで金春秋が外交を、金庾信が軍事を分掌するという親唐自立派を基軸とした権力集中が実現する(武田1985)。国内の体制を固めた金春秋は、前年倭国から派遣されてきていた高向黒麻呂(玄理)らを送って、この年(大化3年)倭国を訪れる。倭国に援助を求めることが目的だったのであろうが、成功した形跡はない。ついで翌年、春秋は一転して唐に乞師に赴き、はじめて百済への出兵の約束を取りつけることに成功する。

唐は、3度の高句麗征討の失敗の後、しばらく高句麗征討を中断していた。高句麗・百済陣営はそれに乗じて、655年に共同して新羅の北界を攻撃し、30余城を陥落させるという戦果をあげた。またもや窮地に立った新羅は、ただちに唐の高宗に乞師する。高宗はこれに応じて出兵するが、高句麗軍と小競り合いをするにとどまった。

倭国が高句麗・百済陣営に明確に接近していくのはこのころからである。655年(斉明元)、百済が100人を超える大使節団を送ってきたのに対し、倭国は折り返し使節を遣わした。さらに翌656年には高句麗からも総勢81人の使節が送られてきたが、このときもすぐさま高句麗に外交使節が派遣された。こうして百済・高句麗からあいついで外交攻勢を受けた倭国は、両国の陣営に急接近していくことになる。そして、それと裏腹に新羅からの使節は655年を最後に、高句麗が滅亡する直前の668年まで倭国に使節を送ってこなくなってしまう。事実上の国交断絶である。

その後、朝鮮半島の動乱はさらに激しさを増していった。660年(斉明6)に唐・新羅連合軍の挟撃を受けた百済が滅ぶと、その復興軍の要請を受けて倭国は百済救援に乗り出す。しかし663年(天智2)、倭国軍が白村江で唐の水軍に完敗を喫してしまい、一転して唐・新羅軍来襲の脅威にさらされることになった。半島情勢の変化で、唐の倭国攻撃の危険が薄らぐのは670年代に入ってからのことである。

以上、山尾・武田両氏の研究によりながら、百済大寺造営前後の東アジア情勢を概観してみた。まず指摘できるのは、百済大寺の造営がはじまる640年代の初頭は、ちょうど唐の高句麗征討計画が始動しはじめる時期に当たっており、この唐の動きを契機に東アジア情勢がにわかに流動化していくということである。史上初の大王による寺院の発願や、やはり倭国で初となる九重塔の造営にこのような東アジア情勢が無関係であったとは思われない。

ただし、もう一方で確認しておかなければならないのは、朝鮮3国相互の抗争に唐が介入することではじまった半島の動乱に倭国が明確に参入するのは、山尾氏が指摘しているように、650年代の後半、すなわち斉明朝に入ってからのことである。ということは、それ以前の段階では、倭国は朝鮮半島での動乱の影響をさまざまな形で受けつつも、まだ動乱の当事者にはなっていなかったことになる。したがって、この段階での国際的契機を無限定に重要視することは禁物である。この問題は百済大寺の造営のみならず、山尾氏が強調するように、大化改新論とも直結する論点であって、きわめて重要である。

640年代の倭国はいまだ半島をめぐる大規模な動乱に直接関与はしていなかったが、のちに検討するように、朝鮮3国の猛烈な外交攻勢をうけながら、半島をめぐる動乱を自国の利益に結びつけようと活発な外交活動をくりひろげていた。この時期にわかに起こった外交の重要性の高まりは、国内の支配層のあり方次第では、その内部対立を激化させる要因にもなりうるも

のであり、実際にもそのように作用していったと認められる。すなわち 640 年代の倭王権は、蘇我氏の独裁的性格が急激に強まるのが主因となって政治的な不安定が生じ、支配層の分裂が進行するなかで 643 年(皇極 2)の上宮王家滅亡事件や改新派の形成があり、改新のクーデターの勃発によって分裂が緩和されてあらたな権力集中が実現するという推移をたどる。こうした政治史の展開をもっぱら国際関係のみから説明しようとするのは、国際的契機の過大評価という誇りを免れないであろうが、半島情勢の緊迫化が右のような歴史的展開の促進要因の一つであったことは認めなければならない。百済大寺の主要伽藍が異例のスピードで造営されていた時期の倭国をめぐる東アジア情勢は、おおむね以上のようなものであった。

(2) 百済大寺発願の対外的契機

そこでつぎに、以上のごとき国際情勢をふまえつつ、百済大寺の発願・造営と国際関係のかわりを具体的に考えてみよう。

まず当時の日中関係をみてみると、630 年(舒明 2)、最初の遣唐使として犬上三田耜・薬師恵日らが派遣されるが、これは同年に百済・高句麗の使節が倭国にきて、唐をめぐる東アジア情勢についての情報をもたらしたことに触発されたものと思われる(山尾 1992)。2 年後に唐使高表仁が三田耜らを送って来倭するが、その際に『旧唐書』倭国伝に「表仁無綏遠之才、与王子(『新唐書』は「王」)争礼、不宣朝命而還」と記されているように、倭国の朝廷でトラブルが起き、その後、653 年まで 20 年にわたって倭・唐間の通交が途絶えるのである。したがって、百済大寺発願の契機として、唐からの直接の影響を考えることは困難である。

そこでつぎに注目されるのが、在唐学問僧の帰国である。彼らは遣隋使の船で 7 世紀初頭に隋にわたった留学僧で、推古朝の末年から舒明朝にかけて、続々と帰国してくる(表 2)。

表 2.

(1) 623(推古 31)年 7 月	学問僧の恵齊・恵光、留学生恵日・福因ら新羅使の船に便乗して、唐から帰国する。
(2) 632(舒明 4)年 10 月	唐使高表仁、犬上御田歙を送って新羅使とともに来朝する。学問僧靈雲、僧旻らも同道する。
(3) 639(舒明 11)年 9 月	学問僧恵隱・恵雲、新羅の送使にしがって唐から帰国する。
(4) 640(舒明 12)年 10 月	学問僧清安(南淵請安)・学生高向玄理、新羅經由新羅使にしがって帰国する。

これらの学問僧は僧旻が 24 年、恵隱が 31 年など、長期にわたって中国に滞在して仏教を学んでおり、帰国後は大王の信任も厚く、法興寺の慧慈・慧聡・観勒などの高句麗僧・百済僧とは

一線を画していたと思われる。学問僧の帰国は、舒明天皇にとって自身の仏教信仰を深める契機ともなったであろうし、彼らの止住する寺院建立の必要性を痛感するようになったと思われる。これらのことが舒明の百済大寺発願の直接の動機になったことは十分に考えられよう（田村 1994）。恵隠が帰国した翌年の 640 年（舒明 12）に舒明天皇が大規模な斎会を催し、恵隠に『無量寿経』を講説させている（『書紀』同年 5 月辛丑条）ことも宮廷仏教の端緒を示すものとして注目される。

もう一つこれらの記事で注意されるのは、在唐学問僧がすべて新羅經由で、新羅船に便乗して帰国していることである。これは、当時の東アジア情勢に規定されたもので、この段階で新羅はすでに唐と親交を結んでいたが、百済と高句麗はその新羅に攻撃を繰り返したために唐の譴責を受けており、朝鮮 3 国で唐にもっとも太いパイプを通じていた国が新羅であった。在唐学問僧は長安で新羅僧と親交があった可能性もあり、さらに途中、新羅の都金城（慶州）などに滞在した際に、新羅仏教界と接触したことも考えられる（田村 1994）。

舒明天皇が百済大寺を発願した国際的な契機としては、やはり在唐学問僧の帰国をまずあげるべきであろうが、そのほかに国内的な要因も考えてみる必要がある。周知のように、欽明朝の仏教公伝以来、飛鳥仏教を主導してきたのは蘇我氏とその氏寺である飛鳥寺であった。それに対して推古朝末年以来の留学僧の帰国は、在来の飛鳥仏教と系統を異にする新仏教の伝来を意味するといつてよい。田村氏は百済大寺造営の理由として飛鳥寺の勢力に対抗しうる僧侶を自己の側に掌握しておく必要があったと解しているし（田村 1963）、報告書ではさらに明確に、636 年（舒明 8）年に飛鳥岡本宮が焼失したのちは、「舒明は蘇我氏の本拠である飛鳥へ戻ろうとはせず、やがて百済大寺と百済宮の建設に着手する。こうした点からみると、蘇我蝦夷によって擁立された舒明ではあったが、治世の後半においては、蘇我氏との間に確執を生じていた可能性が高いと思う」としている。それに対して大橋氏は、「当時の仏教興隆の主導権は依然として蘇我氏が把握しており、また政治の面でも蘇我氏との対立を避け協調路線を歩んだ舒明があえて仏教受容に際して蘇我氏を挑発するがごとき対抗意識を起したとはとうてい考えられない。……だから舒明朝の百済大寺は、あくまで天皇個人の寺院として発願されたと解すべきである」（大橋 1982）と、蘇我氏・飛鳥寺に対する対抗意識はまだなかったという立場をとっている。

舒明の即位事情は『書紀』に詳述されていて、蘇我蝦夷の後押しのおかげで山背大兄王を抑えて即位できたことは周知の通りであるが、蘇我氏に擁立された大王がのちに蘇我氏と対立するようになることは崇峻の例があるので、舒明もその可能性は否定できないといえる。舒明朝の後半に蘇我氏との確執がどこまで顕在化していたかは定かではないが、飛鳥から 4 km ほど離れた百済川のほとりに「大宮」の造営とともに、帰国学問僧の受け皿として「大寺」を発願

したとなると、その政治的意味を考えないわけにはいかないであろう。しかも百済大寺は初の大王発願の寺院であり、それに加えてこれまた倭国で初めての巨大な九重塔の建立を企図したことを、「あくまで天皇個人の寺院として発願された」と理解することはできないと考える。

623年に帰国した恵日らが、在唐の留学生・学問僧たちはみな学業を終えているので召還すべきこと、また唐は法律・制度の整った立派な国なので、今後も通交すべきことを建言したことは有名であるが、舒明朝に学生・学問僧の帰国が相ついだのは、この建言を受けてのことであったとみられ、やがて帰国した人びとのなかから僧旻・高向玄理・南淵請安など大化改新に関係の深い人物が輩出していったことも改めて指摘するまでもあるまい。いわば、改新の政治理念はかれら帰国した学生・学問僧が中心となって創出したものといって過言でないであろう。そうすると、舒明が帰国学問僧の受け皿として大王初の寺院を発願したことには、この百済大寺を唐の政治理念をバックボーンとした新しい王権のシンボルにしようとする意図が込められていたのではないかと考える。それが舒明没後、蘇我氏の専横が顕著となり、支配層内部の亀裂が深まるにつれて、百済大寺をシンボルとする王権に結集する勢力の反蘇我氏性格が顕在化していったのではなからうか。このように考えれば、百済大寺は改新政権のシンボリック存在ということになり、その造営が改新後も皇祖母尊宝皇女を中心に引き続き進められたことがよく理解できよう。

(3) 百済大寺九重塔のモデル

さて、百済大寺の九重塔のモデルとしては、百済弥勒寺の木塔と新羅皇龍寺の九重塔との関係を考えてみる必要があるだろう。

百済の弥勒寺は、武王代(600-641)に創建されたという伝承が『三国遺事』に伝えられており、新羅の真平王(579-632)が工人を送ってこれを助けたという。塔と金堂の組合せを三つならべた三院並列式の特異な伽藍配置で、東西院の塔は石塔であるが、中院のみが木塔であった。現在六層のみが残る西塔が本来九層であったと推定されるところから、木塔も九層であったのではないかという見方が出されている。そうであれば、この木塔も武王代には完成したであろうから、皇龍寺九重塔よりも時期的に若干遡ることになり、百済大寺の九重塔のモデルとなった可能性もでてくる。

一方、皇龍寺の九重塔は朝鮮半島の抗争が激化するなかで造立される。すなわち同九重塔は、638年に入唐し、643年に新羅に帰国した王族の僧侶慈蔵の建言によって建立が企図され、同じく王族の龍樹(別名龍春、金春秋の父)と百済の大匠阿非(阿非知)が工匠200人を率いて645年に着工し、646年に竣工したと伝えられる(『皇龍寺刹柱本記』(以下『刹柱本記』という)・『三国史記』善徳王14年3月条・『三国遺事』巻3 皇龍寺九層塔)。これはちょうど、642年に

百済の大攻勢を受けて新羅が軍事的に窮地に陥った直後にあっている。李成市氏によれば、新羅の仏教はこの対外的な危機を契機に急速に護国的な性格を強め、王室仏教から国家仏教の段階へと移行していった。皇龍寺の九重塔建立も、『刹柱本記』に「皇龍寺九層塔波を建つれば、海東諸国は渾べて汝の国に降らん」と語られているように、護国を目的としたものであったと考えられる。皇龍寺の九重塔は、新羅未曾有の国難のなかで唐との同盟関係の樹立と、国家仏教への脱皮を象徴するものであったのである（李 1983・1995）。いわば国際的契機が内政に転化した顕著な例であって、当時の新羅をとりまく国際情勢の厳しさを如実に物語るものであるが、この時点の倭国の置かれていた立場は新羅と大きく異なっており、同列に論じられないことはいうまでもない。

皇龍寺の九重塔は、文献に伝えられている通りであるとする、639年発願の百済大寺の九重塔よりもわずかながら新しいことになり、その影響を考えることは時間的に不可能となる。ただし、この皇龍寺の九重塔の建立に関する文献史料は、もっとも信頼できる『刹柱本記』もふくめて後代の縁起類であることが若干問題となろう。もっとも詳しい記載を残しているのが『三国遺事』であるが、そこでは入唐した慈蔵が五台山で文殊菩薩から法を受けられたのち、突然現われた神人（池龍）との問答のなかで「九層塔」建立の啓示を受け、643年に新羅に帰国後、建塔を奏上して実現したとされている。龍神伝説と結びついた神異譚の形をとった縁起である。871年の第3重修の際の『刹柱本記』では「九層塔」の建立を勧めたのは終南山の円香禪師で、神異譚にはなっていないなど、新羅末期から高麗へかけての時期に立塔縁起が急速に発展したことがうかがわれる（武田 1986）。それでは、もっとも古い『刹柱本記』が歴史史料として全面的に信頼がおけるかという点、慈蔵の生い立ちから説き起こしているなど、慈蔵との結びつきを強調している点は『三国遺事』に通じるし、645年に刹柱を立てて翌年竣工したというのが事実であれば、当時の倭国の例からすると驚異的なスピードであったことになる。またもう一つ解しがたいのは、百済から招聘した「大匠阿非」が「小匠」200人を率いて塔を造ったというのであるが（この話は『三国遺事』にもみえている）、そもそも皇龍寺の九重塔の建立は642年の百済の大攻勢で窮地に陥ったことを打開するために、護国のシンボルとして発願されたのであるから、その建立を百済の大匠阿非が主導したというのは不自然の感が否めないし、果たして武力抗争のまっただ中であつた敵国百済から有力な工匠を招聘するようなことをするのかはなほ疑問である。慈蔵の発案としている点と百済の大匠による建造という話は両立しがたいのではないかというのが筆者の考えである。

このように『刹柱本記』には事実の忠実な記録とは考えにくい内容も含まれている。『刹柱本記』は皇龍寺九重塔跡の心礎部分より出土した金銅製舍利函に刻銘された金石文ではあるが、それ自体まぎれもなく皇龍寺九重塔の縁起を記したものであり、しかもその成立は九重塔の創建

から200年以上経ているから、まずは皇龍寺九重塔の現存最古の縁起として扱われるべきであろう。したがって九重塔は643年に帰国した慈蔵の建言により645年に刹柱が立てられ、翌年竣工したという『刹柱本記』の記載に全幅の信頼を置くべきではないと考える。現時点でこれ以上のことはいいがたいが、かりに皇龍寺九重塔と慈蔵の関係を否定して、百済の大匠による建造を生かすことができれば、その着工時期を若干遡らせて考えることも可能となろう。そうすると、皇龍寺九重塔が百済大寺の九重塔のモデルとなった可能性も出てくるが、もちろん確証はない（なお、この問題はヤン・ジョンソク氏論文のコメント（第四章IVの2）でやや詳しく述べたので参照されたい）。

一方、百済の弥勒寺木塔をモデルと考えても、多くの問題が残る。そもそも弥勒寺の木塔が九重塔であったという確証がないし、また既述のように、在唐学問僧がすべて新羅経由で帰国してきていて、この時期、倭国は百済よりも新羅の仏教界とのつながりが深かったのも、その点からいっても弥勒寺の影響は考えにくいようにも思われる。もっとも弥勒寺の造営には新羅の真平王が工人を送って援助したという所伝が『三国遺事』にあるので、新羅も弥勒寺木塔造営の情報と技術を保持していたとみられ、新羅経由で弥勒寺木塔の情報と技術が伝えられたという可能性も考えられよう。また舒明朝は、仏教界は新羅とより親密であったが、『書紀』によれば百済使が630（舒明2）・635（舒明7）・638（舒明10）年と派遣されてきており、百済との関係が決して疎遠だったわけではない。そこで政治的には親密な関係にある百済が百済大寺の造営を援助したという可能性も否定しきれないように思われる。

結局、百済大寺の九重塔のモデルに関しては確かなことはわからないというのが結論である。

（4）改新前夜の対外関係・国内政局と百済大寺の造営

「本稿1」で、舒明天皇によって639年に発願された百済大寺は、舒明朝のうちに九重塔の建設は始まっていたが、一つの堂宇も完成せず、つぎの皇極天皇の即位直後に編成された造営体制のもとで異例のスピードで九重塔と金堂の造営が進められ、九重塔はおそくとも645年まで、金堂もそれからあまり隔たらない時期に完成したと考えた。

このように考えて大過ないとすると、皇極朝の百済大寺の造営はこれまでの寺院造営にまったく例がないほど迅速で大規模なものだったことになる。そこでここでは、その背景を探ってみよう。

「本稿2の(1)」でみたように、皇極天皇の即位に相前後して、唐の高句麗征討の動きを契機として半島情勢がにわかに緊迫してくる。さらに642年7月の百済による旧加耶地域の新羅からの奪取という事件によって半島情勢はいっきに流動化し、同年（皇極元）から翌643年にかけて朝鮮諸国の使節が倭国へ頻りにやってくるようになる。『書紀』に関係記事が多数掲載され

表3. 642～643年の対外関係略年表

(1)	642(皇極1). 1. 29	百済の弔使、来朝。国内の政変などを伝える。
(2)*	642(皇極1). 2. 6	高句麗使、来朝。淵蓋蘇文のクーデターを伝える。
(3)*	642(皇極1). 2. 22	遣高句麗使・遣百済使・遣新羅使・遣任那使を任命する。
(4)	642(皇極1). 3. 6	新羅の賀騰極使・弔喪使、来朝。
(5)*	642(皇極1). 4. 8	百済王子翹岐、天皇に拝す。
(6)*	642(皇極1). 5. 16	遣百済使、百済調使を伴って帰国。
(7)*	642(皇極1). 5. 18	百済使、調を進める。
(8)*	642(皇極1). 7. 22	百済使大佐平智積らを饗す。
(9)*	642(皇極1). 8. 13	百済の質達率長福に小徳、中客以下に位1級を授け、物を賜う。
(10)*	642(皇極1). 8. 15	百済参官らに船を給い、帰国させる。
(11)	643(皇極2). 4. 21	百済王子翹岐らが調使と共に来朝。
(12)	643(皇極2). 6. 13	高句麗使、来朝。
(13)	643(皇極2). 6. 23	百済の進調使大使達率自斯・副使恩率軍善ら、難波津に到る。
(14)	643(皇極2). 7. 3	難波郡で、百済の調と献上物を点検し、前例に合わないために大使らを詰問する。

付注 *印は、643年のできごと（ただし月日は不明）と考えられる事項

ているが、ここに大きな問題がある。それは、『書紀』の皇極元年の朝鮮関係記事には、明らかに一年あとにずらすべきものが少なからず含まれていることである。どの記事がそれに該当するかは、研究者によって必ずしも一致していない。そこでここで、642～643年の対外関係略年表を作成して、私見を示してみると以下のようになる。

『書紀』の皇極元年紀に掲げられている対外関係記事の大半は、実際には翌643年(皇極2)のできごととみるべきものであることが、これまでの研究で指摘されている。それはたとえば表3(2)の高句麗使が伝えた淵蓋蘇文のクーデターは、『旧唐書』『資治通鑑』などの中国史料も『三国史記』も一致して642年(ただし『資治通鑑』11月丁巳とするのに対して、『三国史記』は10月とする)のこととしているので、『書紀』の紀年に誤りがあり、翌年に移動すべきことがわかる。また(5)の百済王子翹岐の拜朝記事は(11)の翹岐の来朝記事と矛盾するが、翹岐とは百済義慈王の王子豊璋の別名で(西本1985)、643年に来朝したと考えられるので、これは(11)が正しく、(5)の紀年を修正すべきと考えられる。

このように、皇極元年(642)紀に掲げられている対外関係記事の多くは翌643年のできごととみるべきなのであるが、筆者は、少なくとも(1)と(4)は、642年のできごととみてさしつかえないと考える。(1)はこれまで(11)と同事重出とみて、643年のできごとと見なすのが通説となっているが、承服しがたい。というのは、まず(1)は前年10月に亡くなった舒明天皇を悼む弔使であり、しかもおそらく舒明の死を知らせるために派遣された阿曇比羅夫が使節を同道しているから、倭国の側からの働きかけによって遣わされてきた使者とみるべきであるし、(1)で百済の弔使を同道した阿曇比羅夫は、使節が筑紫に到着すると、舒明天皇の葬儀に奉仕す

るために「馭馬」を飛ばして一行より先に入京している。『書紀』によれば、舒明天皇は同年12月に滑谷岡なめだにおかに埋葬されているので、この点に着目すると、阿曇比羅夫の入京はそれ以前のことと考えざるを得ない。しかも(4)の新羅使が賀騰極使と弔喪使の二つから構成されているのに対し、(1)が弔使のみなのは、阿曇比羅夫の百済への派遣が皇極天皇の即位(642年正月)以前だったためとみるのが自然と思われるから、(1)は『書紀』の紀年どおりで何らさしつかえないことになる。しかも(1)の弔使は、翹岐らが「嶋」に追放されたことを伝えているのに、同じ翹岐が来朝した(11)と同事重出とみるのは、何としてもおかしい。それを従来の説はさまざまな無理な解釈をして、両者を同事重出とみなしてきたのである。それよりも、右のように両者はまったく別のできごとと理解する方がはるかに無理がないと考える。

また(4)も同様に『書紀』の紀年どおりと考えてよいと思われるが、こちらは賀騰極使が同道しているので、倭国からの使者が新羅に派遣されたのは皇極即位以降のことになる。『書紀』には同年10月に「新羅弔使船、与賀騰極使船、泊于壱岐嶋」という記事がみえるが、これは『書紀』の月日に疑問が残るものの、(4)の使節が帰路で暴風雨などをさけて一時停泊したものとみられる。山尾氏は「泊」を「渡来の船の碇泊をいう」とするが(山尾1992)、したがいがたい。「泊」の字義にそのような特別な意味はないし、斉明7年正月庚戌条の「御船、泊于伊豫熟田津石湯行宮」などの用例をそのように解するのも困難である。この後に新羅船の来朝記事がみあたらないことも、山尾氏の解釈に不利であろう。

皇極元年紀の対外関係記事の紀年を右のようにみたくて皇極朝の朝鮮諸国との関係をたどってみると、舒明天皇の死後間もなく、倭国から百済に舒明死去を知らせる使者が派遣され、それを受けて642年早々には百済から弔使が遣わされてくる。その弔使から本国で政変が起きて翹岐(豊璋)らが「嶋」に追放されたことが伝えられた。そうするとこの百済の政変というのは、義慈王の即位後の641年に太子の豊璋や内佐平岐味らの有力者を都から追放するというものであったことになる。その後、3月には新羅から賀騰極使・弔喪使が派遣されてきた。そして7月に百済が新羅に大攻勢をかけ、旧加耶地域の奪取に成功し、ついで9月から11月の間に高句麗で淵蓋蘇文のクーデターが起こる。

これらの半島の大事件の情報がいつ倭国に伝えられたかは、『書紀』の紀年に混乱があるのではっきりしないが、翌643年になってからのことであろう。(11)と(12)の記事は、いずれにも「筑紫大宰、馳駢奏曰」と記されているので、この二つの使節がそれらの事件を知らせる両国の特使であったとみられる。(2)は(12)と同事重出である。(3)と同日に高句麗と百済の使節がいっしょに難波の客館でもてなされているので、両国の使者の来倭はほぼ同時期であったとみてよい。両国使節の来朝を受けて、倭国はただちに遣高句麗使・遣百済使・遣新羅使・遣任那使を任命して実地検分のために派遣した((3))。その後百済は達率自斯を大使とする

「進調使」を再び派遣してくるが、難波郡での勘検で「国調」が前例よりも少ないとして問題となる（(13)(14)）。この「進調使」の派遣は、(3)の实地検分を受けてのものであろう。

以上のように関係史料を整理すると、642年7月の事件を境にして百済と新羅の倭国への接し方は、対照的な違いを見せることが知られる。百済はそれまでに例のないほどの高位・高官を外交使節や質として派遣してくる。百済王子翹岐（豊璋）をはじめ、百済使大佐平（百済朝廷の最高位）智積、質の達率（百済16等官位の第2）長福や達率武子、百済進調使大使達率自斯・副使恩率（百済16等官位の第3）軍善などの重要人物がつぎつぎと来朝してくるのである。ただし翹岐は、641年にいったん都から追放されているので、それを呼び戻したうえで大使（倭国側では「質」と見なした）に任じて派遣したものとみられ、きわめて変則的な人選であった。その豊璋を「大使」として倭国に送ったのは、山尾氏のいうように、実質的な国外追放であり、巧妙な百済の外交戦略でもあった（山尾1992）。大佐平智積のもまた本国で失脚して倭国に遣わされてきた可能性が高い（関1989）。このような内情があったとはいえ、百済の倭国に対する外交攻勢は百済の親倭路線の現われに他ならず、百済による旧加耶地域の支配の承認を倭国に取りつけるという目的があったと考えられる。

一方新羅は、まったく逆にこの後は倭国との関係は疎遠となり、645年の改新のクーデター勃発まで使節の往来はみられないのである。新羅はこのころ軍事的に窮地に立たされ、まず宿敵高句麗に救援を仰いで拒絶され、さらに643年に至って唐への救援要請に踏み切るという外交政策の大転換に奔走していたときだったので、倭国との関係が疎遠になるのも当然であった。高句麗も淵蓋蘇文のクーデター後、金銀を含む信物を携えた使節団を送ってきている（(2)(12)）ことと比べると、まことに対照的である。

百済大寺の造営体制が整えられ、それまでの寺院造営に例のないほどのスピードで九重塔と金堂の造営が並行して進められていた皇極朝は、ちょうど朝鮮半島で大きな動きが立て続けに起こった時期にあたっていて、外交使節が相ついで来朝してさまざまな情報もたらされた。それに対して倭国の朝廷はすぐさま半島情勢の検分を目的とした使節を3国と「任那」に派遣して状況の正確な把握に努めるとともに、とくに旧加耶地域の領有を実現した百済に対しては、「任那の調」の納入を求めていったと思われ、645年（大化元）7月には「百済調使」が「任那使」を兼領して「任那の調」を進上している。

半島情勢の急激な変化は、それにどのような外交方針で臨むかをめぐって倭国の支配層のなかで議論をよび、派閥抗争を激化させていったのではないかと思われる。皇極元年紀の冒頭には、天皇が即位して蝦夷が引き続き大臣の地位にとどまったことを記したあとに「大臣兎入鹿、自執国政、威勝於父」とあり、以後、皇極紀には蘇我氏の専横ぶりを伝える記事が続くことはよく知られている。蝦夷が「祖廟」を葛城の高宮に建てて、「八佾の舞」を舞わせたという話な

どは、祖廟も八佾の舞も当時の倭国には実在しなかったと思われるので、事実とは考えがたい。挙国の民を発して蝦夷・入鹿親子の墓を造り、それぞれ大陵・小陵とよばせたとか、上宮王家の乳部を集めて、勝手に墓所で酷使したので、上宮の大娘姫王^{おおいらつめのひめみこ}が蘇我氏は国政を私物化していると憤慨したというような逸話も、蘇我氏の専横ぶりを印象づけるためにだいぶ誇張された話になっているとみてよいであろう。しかし643年(皇極2)には、現実に上宮王家滅亡事件がおこっているし、翌皇極3年紀には蝦夷・入鹿父子は飛鳥の甘檜岡に家を並べて建て、蝦夷の家を「上の宮門」、入鹿の家を「谷の宮門」といい、子どもたちを王子とよばせたといい、やはり専横ぶりを示すエピソードとともに、家の周囲に城柵をめぐらして要塞化し、兵庫(武器庫)や防火用水を設け、力人に家を警備させたり、畝傍山の東に建てた家の周囲に池を掘ったり、兵庫に弓箭を蓄えて防備を固めて、いつも50人の兵士に身邊を護衛をさせていたというような、蘇我氏が身邊の警備に非常に気をつけていた話も載せられている。これらの記事はかなりの程度、当時の状況を伝えているとみてよいと思われる。

蘇我氏の横暴を伝えた記事は皇極朝に集中している。これは皇極朝になって蝦夷に代わって息子の入鹿が実権をにぎって政治に強引な手法を用いたということが最大の原因であろうが、それが支配層のなかに亀裂を生んでいったことは容易に想像がつく。ちょうどそのようなときに朝鮮半島ではあいついで大事件が勃発し、事態はにわかに流動化して、百済や高句麗が倭国に外交攻勢をかけてくるようになる。これが契機となって支配層の亀裂はさらに深まり、ついには上宮王家滅亡事件が起こる。事件後、蘇我氏に対する反発が強まり、蘇我氏は自ら防備を強化せざるを得なくなる——これが改新前夜の倭王権内部の状況であったのではないかと推測する。

百済大寺の主要伽藍の造営は、まさに倭王権内部の分裂が深まっていく改新前夜に、蘇我氏の拠点となっていた飛鳥の外の百済川のほとりで異例のスピードで進められていたということになる。そうすると、皇極天皇の百済大寺造営が明確に政治的意味をもつものであったことはもはや明らかであろう。唐の政治理念を標榜する新しい王権のシンボルとされた百済大寺の造営を進める皇極天皇のもとには、しだいに反蘇我氏の政治勢力が結集してきたであろう。クーデターが起きるころには、百済の地には列島初の九重塔がすでにその偉容を現わしていたはずであるし、金堂も完成間近だったのではないかと思われる。

クーデター後も宝皇女を中心にして百済大寺の造営が進められたのは、百済大寺がまさにクーデターの中心人物中大兄皇子の両親である舒明・皇極両天皇の権威を体現した存在であると同時に、改新の政治理念を象徴する存在でもあったからにほかならない。だから、クーデター派によって擁立された孝徳天皇は百済大寺の造営に関わることができなかったのである。

おわりに

以上、舒明朝に発願され、皇極朝に改めて造営が開始された百済大寺について、その造営の契機を、当時の東アジア世界のなかで考えてみた。最後に論じ残した点を多少補足しておきたい。

大化改新の原因は、大きくいって国内的要因と国際的要因（対外的契機）を考えるのが一般的であるが、それらの要因のいずれを重視するかは、これまでの研究でもさまざまな見解がみられる。筆者は、改新の要因としては、やはり国内的要因を基本に考えるべきであるという立場をとる。もちろん対外的要因も軽視はできないが、山尾幸久氏が強調しているように、640年代においては、半島では唐の高句麗征討がはじまってにわかには緊張が高まるとはいえ、倭国はまだ百済や高句麗の外交攻勢の対象にすぎなかった。その倭国が明らかに高句麗・百済陣営側に参入していくのは650年代も後半の斉明朝に入ってからのものであり、唐・新羅陣営と実際に戦火を交える可能性が出てくるのは、660年に百済が滅んでその復興運動への加担を斉明女帝が決断したあとのことである。したがって改新前後の倭王権は、半島で始まった戦争にすぐさま参戦することなどはまったく考えていなかったと思われる。百済の倭国接近策に乗じて、それまで新羅が負担をしてきた「任那の調」を百済に負担をさせているから、まだ朝鮮諸国の対倭政策を値踏みしながら、少しでも国益にかなった外交政策をとろうとしていた段階であった。

この段階のもっとも重要な政治課題は、王権の内部分裂の解消と、地方支配の刷新という二つの国内問題であったと思われる。前者がクーデターの直接の原因となることはいうまでもないが、後者は改新政権が真っ先に着手した地方政策である国造のクニの解体と全国的な評の設置という画期的な政策の最大の要因となったと考えられるものである。

筆者は、百済大寺の造営は、右の大化改新をめぐる国内問題のうち、王権の分裂の問題と密接にかかわると考える。報告書が指摘しているように、舒明天皇の百済大寺の発願は、その背後に舒明朝後半期に生じた蘇我氏と舒明の確執があった可能性が強い。それに在唐学問僧の帰国という対外的要因が重なって、唐の政治理念を象徴する新たな王権のシンボルとしての百済大寺が舒明によって発願されるのである。

舒明の死後、大後の皇極が百済大寺の造営を引き継ぐ。これに亡夫の遺業の継承という意味があったことはもちろんであるが、単なる継承ではなかった。大寺の造営体制を創設して、空前の大寺院の造営を軌道に乗せて造営工事を強力に推進していったのである。皇極が造営体制の強化を行ったのは、新たな王権のシンボルの一刻も早い完成と、そのもとへの反蘇我氏勢力の結集のためであったとみられる。皇極朝に進行する蘇我氏専制化の裏では、上宮王家滅亡事件に代表される諸勢力相互の摩擦を生みながらも、百済大寺の造営を強力に進める皇極女帝の

もとで反蘇我氏勢力がしだいに組織されていったと推測される。その結果が、改新直前の蘇我氏の孤立と武装化にほかならなかった。

改新のクーデターの直後の645年(大化元)8月、改新政権は「大寺」に僧尼を集めて詔を發布し、仏教公伝以来、蘇我稲目・馬子の仏教興隆の功績をたたえとともに、今後はその法統を孝徳が引き継ぐことを宣言した。この「大寺」については、飛鳥寺(法興寺)と百済大寺の両説があるが、百済大寺はこの詔なかで「百済寺」とよばれているし、詔が飛鳥寺を拠点にして仏教を興隆してきた蘇我氏の事績を孝徳が引き継ぐことを宣言した内容になっているから、それにもっともふさわしい場所は飛鳥寺である。この詔の主眼は、それまで蘇我氏が主導してきた倭国の仏教興隆を王権が引き継ぐことを明らかにすることにあつたとみられるが、それを通して蘇我氏の氏寺であった飛鳥寺を王権直属の「大寺」に準じて扱うことを示す意味もあつたと解される。

この日、僧尼の教導のために新たに十師が任命されるとともに、十師の一人である恵妙が「百済寺」の寺主となっている。また十師の一人である僧旻には「寺主」の肩書きが付されているが、これは詔發布の場とされた飛鳥寺の寺主のこととみられる。そうすると、この時点で寺主は飛鳥寺と百済寺の二つの寺院におかれた僧官ということになろう。寺主は、律令制下では寺院の運営組織である三綱の三役の一つであるが、この段階ではまだ三綱は成立していないので、それとは別と考えざるを得ない。飛鳥寺と百済寺は、いずれもこの時点で「大寺」とよばれていたことが知られるから、大化の寺主とは王権直属の寺院である「大寺」の管轄を任務とした僧官と考えられる。僧旻が飛鳥寺の寺主に任命されたのは、おそらくクーデターの直後のことであろう。

こうして百済大寺は、改新のクーデター後は、新たに「大寺」の扱いを受けることになった飛鳥寺とともに、いわば王権の「二大寺」とされたことが知られる。本文で述べたように、この時点で九重塔が完成していたことは確実であり、金堂も完成間近か、あるいはすでに完成していたと考えられる。

改新政権を象徴する寺院として建設が急がれた百済大寺であったが、クーデターによって蘇我氏が打倒されて、蘇我氏の氏寺であった飛鳥寺が「大寺」となり、さらに難波遷都が行われると、百済の地は都から遠く離れてしまい、さしもの大伽藍もその政治的意義は急速に薄れていったと想像される。改新の政治理念を象徴する存在として、舒明・皇極らによって造営が進められた空前の大寺院である百済大寺は、蘇我氏の打倒に成功し、改新政権が樹立されると、もはやその歴史的使命の大半は終えることになるのである。

参考文献

- 飛鳥資料館 1999 『幻のおおでら—百済大寺』、飛鳥資料館。
- 大橋一章 1976 「飛鳥寺の創立に関する問題」『佛教藝術』107。
- 大橋一章 1979 「山田寺造営考」『美術史研究』16。
- 大橋一章 1982 「百済大寺造営考」『美術史研究』19。
- 大脇 潔 1995 「吉備寺はなかった—「京内廿四寺」の比定に関連して—」『文化財論叢 II』、同朋舎出版。
- 木下正史 2005 『飛鳥幻の寺、大官大寺の謎』〈角川選書 369〉、角川書店。
- 金 東賢 1993 「皇龍寺跡の発掘」『佛教藝術』207。
- 小杉一雄 1934 「六朝及隋代における塔基の表示に就いて」『中央美術』13。
- 鈴木靖民 1970 「皇極紀朝鮮関係記事の基礎的研究」『国史学』82・83。
- 鈴木英夫 1990 「大化改新直前の倭国と百済」『続日本紀研究』272。
- 関 晃 1989 「百済砂宅智積造寺碑について」『玉藻』24 (のちに『関晃著作集』5 (吉川弘文館 1997) に収録)
- 武田幸男 1985 「新羅“毗曇の乱”の一視角」『三上次男博士喜寿記念論文集 歴史編』、平凡社。
- 武田幸男 1986 「創寺縁起からみた新羅人の国際観」『中村治兵衛先生古稀記念 東洋史論叢』、刀水書房。
- 田村圓澄 1963 「国家仏教の成立過程」『史淵』90 (のちに『日本仏教史』I、法蔵館、1982 に収録)。
- 田村圓澄 1994 『飛鳥・白鳳仏教史』上、吉川弘文館。
- 張 慶浩 1993 「弥勒寺跡の発掘」『佛教藝術』207。
- 塚口義信 1992 「百済大寺に関する基礎的考察—「大安寺伽藍縁起并流記資財帳」所載の焼失記事を中心として—」『日本書紀研究』18、橘書房。
- 直木孝次郎 1998 「百済大寺の建立と阿倍氏」『相愛大学研究論集』15-1。
- 中井真孝 1971 「大化元年八月癸卯詔をめぐる諸問題」『仏教史学』15-1 (のちに『日本古代仏教制度史の研究』、法蔵館、1991 に改訂のうえ収録)。
- 奈良文化財研究所 2003 『大和吉備池廃寺—百済大寺跡—』、吉川弘文館。
- 西本昌弘 1985 「豊璋と翹岐—大化改新前夜の倭国と百済—」『ヒストリア』107。
- 福山敏男 1948 「額田寺」『奈良朝寺院の研究』、綜芸社。
- 星野良史 1986 「百済大寺の創立に関する一考察」『法政大学大学院紀要』16。
- 水野柳太郎 1957 「大安寺伽藍縁起并流記資財帳について」『南都佛教』3 (のちに『日本古代の寺院と史料』吉川弘文館、1993 に改訂のうえ収録)。
- 三舟隆之 2001 「百済大寺の造営とその性格」『日本歴史』639。
- 山尾幸久 1989 「古代の日朝関係」、橘書房。
- 山尾幸久 1992 「六四〇年代の東アジアとヤマト国家」『青丘学術論集』2。
- 李 成市 1983 「新羅中代の国家と仏教」『東洋史研究』42-3 (のちに『古代東アジアの民族と国家』(岩波書店 1998 に収録)。
- 李 成市 1995 「新羅僧・慈蔵の政治外交上の役割」(『朝鮮文化研究』2、のちに同上書に収録)。

付記：本稿は2005年3月に中国社会科学院考古研究所で開催されたシンポジウムの報告原稿を全面的に書き直したもので、論旨を変更した部分もある。報告にあたっては佐川正敏氏に種々ご教示をいただいた。また発表の際には、小澤毅氏に貴重なご意見をいただいた。合わせて感謝の意を表したい。